第７回「被災地の遺跡を考える見学会」に参加して

７月９日に行われた「兵庫津」遺跡見学会の参加者から寄せられた感想文をご紹介します。

■高野知子さん（甲南大学文学部３回生）

今回私は、第７回の「見学会」に参加させていただき、「兵庫津遺跡」の遺跡・遺物の見学と、「兵庫津遺跡」周辺の史跡の見学をしました。このような見学会に参加したのは今回が初めてで、行く前は少し戸惑っていたのですが、実際に遺跡発掘現場に行ってみると（基本的に、モノをみるのが好きなのもあって）けっこう楽しくいろいろなモノに触れることができました。

遺跡の方は、発掘の進行状態と私の知識のなさにより、あまりよくわからなかったのですが（車の音で、解説してくださっているのも聞き取りにくかったのです）、遺物の方は、思っていたよりも沢山あって、実際に手にとってみることもでき、満足できました。周辺の史跡見学も、兵庫県に住んでいながら、あまり知らなかったところなどを知ることができ、解説もして下さってわかりやすく、楽しかったです。

私自身、日本史は好きなのですが、大学では社会学を専攻しているため、遺跡などに触れる機会が、展示会などがなければ、ほとんどありませんでした。だから今回参加できたことは、本当に貴重な機会だったと思います。自分が住んでいるところの歴史も知らないというのもなにか寂しい気がします。私のように、日頃歴史に触れない人間でも、このように見学会などがあれば、自分の住んでいるところの歴史に触れることができる、良い機会になると思います。多くの人にこのような機会があることをどんどん知らせて欲しいと思います。

■上中かおりさん（甲南大学文学部３回生）

今回初めて参加させて頂きました。今まで登呂遺跡しか行ったことがなく、遺跡とは広くて公園のようになっているものだと勝手に思いこんでいた私にとって、普段車が沢山通っている所に遺跡があるのはとても不思議なことでした。

それから、出土品はやはり多くのものが壊れていましたが、中には少ししか欠けていないものや、つやが失われていないものや、最近つくられたものと間違いそうなものも結構あったことも驚きました。出土品はいろいろな地方のものがあったようですが、後で、丹波地方の焼き物が発掘されたけれども、それは今までの常識からすると考えられないことで、何か発見があるかもしれないという話を聞いて、そういう遺跡が近くにあり、実際に出土品を手に取ってみられたことは嬉しいことだと思いました。

今回は授業の都合もあり、途中からしか参加できませんでしたが、現場の方々も丁寧に説明して下さったし、発掘現場の雰囲気も感じることができ、勉強になりました。

■山根政彦さん（甲南大学４回生）

私は正直言って、「教科書に書かれている歴史」にあまり興味が持てなかった。教科書に書いてある歴史は、いかにも、ここに記述していることが「スタンダード」なんだということを強調してくるように思えるからだ。だから、高校時代には一度、「教科書」の中の歴史アレルギーに陥った私である。でも、幼い頃から、弥生時代の人々が残してくれた大中遺跡が身近にあることで、遺跡や歴史的建造物から昔の人々の生活に思いを馳せることは好きであった。

今回の遺跡見学会も、このような動機から参加した次第である。私にとっては、開発され尽くしたかのように見える港町神戸の地下に、兵庫津追跡のような立派な遺構が残っていることに、改めて驚きを感じた。特に、土器や磁器の破片の多さと多彩さに、それを見ているだけでも楽しかったが、備前焼から中国製の磁器まで出土しているということは、いかに兵庫（神戸）の港が、外に向かって開かれていたかということを実感できた。教科書で知った知識を得る感覚とは全く異なる、「自分の肌で感じる身近な神戸の港町」を実感できたように思える。

発掘に携わる人の説明を聞きながら、「あの人の説明では、手で薄くのばした土器が京都から持ち込まれたと言っているが、底を糸で切った土器の方が高級感あふれているように見える。だから後者の土器の方が都のある京都から持ち込まれたのではないか」という疑問を今でも拭い去ることができない。こんな疑問に対して、多様な解釈の可能性があることを実際に専門家から聞ける機会は、そう多くない。

私は歴史学専攻ではないので、兵庫の港に関する専門的知識はそんなに持ち合わせていない。